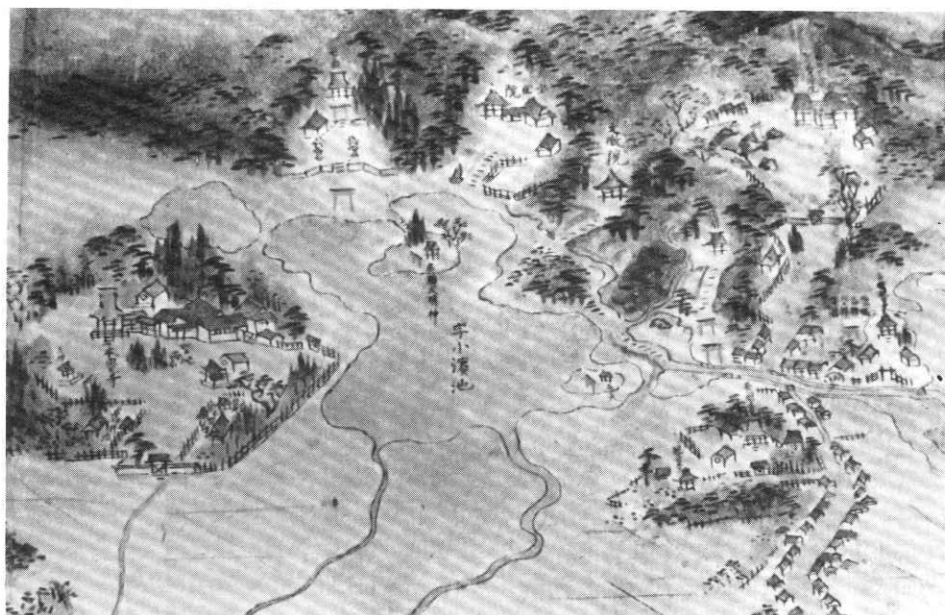


# 郷土館だより

Vol. 8 No.3

1986. 3. 10



東海道分間延絵図 三島宿部分

## 目 次

歴史研究会報告	1
本陣家文書史料集から	2
大平新城について	3
楽寿園の歴史	4・5・6・7

## 歴史研究会分科会調査報告

## 第2回 君沢山蓮馨寺 広小路町1-39

蓮馨寺は市誌の記載によれば総本山は京都の知恩院。大本山は東京の芝の増上寺。本尊は阿弥陀如来。開山は宗祖圓光大師第五世法孫覚生法系明蓮社星誉上人。檀家は70戸となっている。

由来は「元禄年間大火があり類焼して詳細が解らないが、浄土宗三蓮馨寺の一つであって、聖徳太子御自作の日限地蔵尊が安置されてある。遠隔の地から願をかけて信仰する者多く、毎年8月23日には大祭を行なって賑う。境内に芭蕉の句碑がある。当寺の住職に翁の弟子があり、翁は東海道上り下りの折に立寄ったという」と記載されている。

浄土教は「往生浄土」の教えである。日本の浄土教は比叡山浄土教と南都浄土教の諸家を経て法然にいたる。

鎌倉時代になって浄土教が宗派的に独立したが南無阿弥陀仏と名号を唱えて、極楽への往生を期待する念仏宗とよぶべき新宗派があいついで誕生した。はじめに法然が出て浄土宗を開き、その弟子親鸞上人が浄土真宗をたて、さらに一遍上人が時宗を開いた。法然上人から一遍上人にいたる時代には念仏系諸宗のほかにも禅宗や日蓮宗などが興り、まさに仏教革新の世紀であった。

浄土宗の宗派の特徴は庶民仏教としての平等思想にある。

ところで宗祖法然は法然房源空が正式名で現在一般には和順大師と呼ばれているが大師名を3つ贈られてもいる。

明治5年11月18日の蓮馨寺の書上げによれば、蓮馨寺は正応2年(1289)4月圓光大師を開山として、僧2人、尼介1人が住して、境内地5反9セ25歩、但除地、檀家55軒。未寺宝国院無住に付当壬申年5月ヨリ兼務(明治5年)

○宝国院 蓮馨寺末

天正18庚寅年7月法系不詳彈誓上人開山但シ当住無之本寺蓮馨寺住職兼務 5反5セ6歩。

安政元年(1854)震災にあい、明治6年(1873)第26代弁亮再建したとある。

## ①寺名

寺は山号、院号、寺号を持っている。当時の君沢郡から山号は君沢山。蓮沼の近くにあり蓮の花の香る寺という意味で蓮馨寺と名付けられた。

## ②寺格

昔より伊豆の浄土宗の取締であった。寺の住職に入る為にはこの寺で2~3年修業して人物鑑定

を済ませて入山させた。

## ③本尊

阿弥陀如来で足利時代の作と伝えられる。ある時修理の為に京の仏師に修復を頼んだところ仏体の中からもう一体の仏が現われた。(抱き仏)

## ④日限地蔵

作は聖徳太子と言われる。別名約束地蔵。色日朝とも言われた。昔の色町の近くにあったので逢引の場所として最適であった。

地蔵は60年に一度御開帳していたが、御開帳すると宿場は大火事に見舞われるので宿場の人々より要望があり、現在祭りは行なっているが開帳はしていない。地蔵の大きさは約2尺5寸の石できている。地蔵は現在左から右にけさがけで割れ目が出来ているが、これは信者の身替わりでついた傷だという伝説も伝わっている。

## ⑤唯念聖人の碑

唯念は国定忠治の子分の日光の円蔵という大悪人であったと伝えられている。この大悪人が前非を悔い上野で滝に打たれて修業して蓮華講を作り大念仏を唱えたという。

## ⑥子安地蔵

安産祈願の地蔵さま。信者は穴のあいたひしゃくを地蔵にあげる。これは出産の時の苦しみをやわらげる為に、ひしゃくに穴をあけ、水をいくら入れても水は楽に出てしまうということから出た信仰である。

出産後は普通の穴のないひしゃくをお礼にあげている。

## ⑦観音堂

中道の3番の観音堂。観音信仰は主には真言系の信仰である。

## ⑧芭蕉の墓

芭蕉翁の句碑と従前言われていたが住職の話によると、芭蕉は東海道ののぼりくだり8回(往復16回)のほとんどもを蓮馨寺に泊り、そのえんにより芭蕉の遺髪がここに納められたという。遺骨は大津の義仲寺。遺髪は四国に2ヶ所、伊賀の上野と蓮馨寺に納められたといわれている。

## ⑨宗派の変遷

華嚴宗から真言宗、そして浄土宗に変わった。浄土宗からの歴史はおおむね分っているがそれ以前の華嚴、真言については定かではない。ただこの寺の存する所が天平年代の伊豆国分寺の境内にあり、その塔頭の一つであったとは思われる。

⑩太子堂 大正11年法隆寺から分祀する。(稲木)

## 本陣家文書史料集から

## 本陣宿泊賃銭と諸物価の相場

日数のかかる東海道の旅は、金のかかる旅でもあった。ことに参勤交代や幕府公用による拠ろ無い旅は、旅をする者にとって痛い出費となった。そこで、なるべく安あがりな旅にしようと苦心するわけだが、気になるのは諸国の物価であった。物資の流通事情の悪い江戸時代においては、各地方において物の値段は異なっていたから、節約を旨とする公用の旅は前以って先々の諸物価を調べておく必要があった。

各地の本陣には、この種の問い合わせが頻りにあった。次にあげる原文は、文久4年2月に、会津藩から三島宿本陣に宛てて出した諸物価及び宿泊賃銭の問い合わせと、それに対する回答の控えである。

(以下原文)

## 覚

一 金壺両二付	銭六貫五百文
一 白米壺升二付	同式百三拾八文
一 大豆壺升二付	同式百六拾四文
一 春麦壺升二付	同百六拾四文
一 塩壺升二付	同百文
一 味噌壺貫目二付	同壺貫二百文
一 酒壺升二付	同六百元
一 有明油壺升二付	同壺貫式百文
一 飼葉壺貫目二付	同三百文
一 藁壺束二付	同拾四文
一 粉糖壺升二付	同四拾文
一 醤油壺升二付	同五百文
一 焼酎壺升二付	同壺貫八拾文

右之通当駅今日之相場奉

書上候處相違(無)御座候以上

丑 三島宿 御本陣  
二月廿六日 樋口傳左衛門  
会津様御家  
前渡五左衛門様

御請書一札之事

一 御泊御旅籠代	御壺人様二付 銭四百式拾四文ツツ
一 御昼御旅籠代	御壺人様二付 銭百八拾文ツツ

大守公様江戸表江御下向被為  
遊候二付御同日御同勢様

方御上下之無差別一汁  
一菓之御賄二而御旅籠代前  
文之通御取極仕候尤  
御逗留二相成且月越と  
相成候共聊増銭等申  
上間敷依之御請書奉  
差上候以上

丑二月二十六日 樋口傳左衛門  
会津様御内  
前渡五左衛門様  
菅井幸右衛門様

上記が原文に出ている諸物価及び宿泊賃であるが、銭高で書かれているので、これを現代の米の値段を基本として円に換算してみたい。ただし、円に換算することは、便宜上判り易くすることであって、これによって、今、高い安いなどと判定することはできない。現代と江戸時代では、物の生産高、物の価値観、流通事情等のあらゆる面で大きな違いが背景にあるからである。

今、米10kg(ササニシキ)を5500円とする、1升は約825円となる。原文では白米壺升二付式百三拾八文というから、これから換算すると、1文が2円92銭である。以後この率で他の物価を見てみたい。

大豆1升は771円 春麦1升は479円  
塩1升は292円 味噌壺貫目(3.75kg)は3504円  
酒1升(1.8ℓ)は1752円 有明油1升は3504円  
飼葉1貫目は876円 藁1束は41円  
粉糖1升は117円 醤油1升は1460円  
焼酎1升は3154円  
御宿泊旅籠代(1人に付)1209円  
御昼御旅籠代( " ) 526円

上記した諸物価は、現代の米の値段との比較であるので、それをふまえた上で各々に考察していただきたい。それにしても米1升で焼酎3分の1升も買えないというのは少々高いような気がする。

ところで当時の貨幣経済は金銀銅の三貨によるものであった。たとえば元禄年間では、金1両が銀60匁で、銅貨では4貫文(1文銭で4000枚)だった。三貨による相場は、日により、年により変動をみた。文久4年には1両が6貫500文と、銅貨の下落がわかる。庶民の日常生活に必要な銭の下落は、高物価現象で人々を苦しめたものだろう。

(杉村)

## 大平新城について

三島近郊の後北条時代の大平新城（沼津市大平）の紹介をしたいと存じます。

### ●大平新城略記

大平新城又は新莊とも云い、大平村（現在は沼津市大平）と函南村日守（現在は函南町）との境なり、妙向山円教寺の南の山なり。元亀2年（1570年）の頃より小城を築き、富士浅間を祭る。故に富南城とも云う。

北條家の臣、遠山民部これを守り、天正の頃北條左衛門佐氏堯、ここにいる。（駿河記）

新莊古城は天正年中、北條家より新莊新三郎を添えられ、戸倉（徳倉）羽翼とせられしなり。

村方覚君に天正5年御城成就、同6年より高阪源五郎、城野入道伊庵等籠る。同7年春、北條一戦にも不及押領し徳倉に出城を構へ、大平の関城に附勢を籠置堅相守、天正18年国境黄瀬川に関を置堅為守、湯川にも砦を築き獅子浜に大石越後守、泉頭に大藤左衛門国防一人籠置候、徳倉城には、笠原新六郎扣之為に置、長久保城には志水左衛に為守、大平之城には新莊新三郎添えられ、三島を初め在々所々民家に焼払い、一日も干戈動き止む時なく心休隙なしと云う。

上に挙げたる如く此地は徳倉城防戦のため置きし砦にて本丸の地10間に15間許、二の丸も狭小の地なり。今山上に浅間神社あり、山下に円教寺あり、何れも元城地なり。（駿河志料）

### ●大平新城詳解

大平新城は図に見る如く静浦の境い、大平山海城353メートルから北北東に向って延びる尾根が狩野川に突きあたる先端に設けられているか、全体的に南西から北東へ約230メートルにも及ぶ細長い尾根上にあつて総体的にバランスは悪く、南端の最高所（南出丸）より北東に向って3ブロックに岐れ、最も曲輪が密集している部分を本丸として、最東端の広い地を二の丸と名称する。

#### 本丸

南北14メートル、幅5～7メートルの平場で南へ一段下り長さ8メートルの補助部をつけている。南出丸との境との空堀幅8メートル、深さ1メートルまでは長さ28メートルのゆるい尾根で一方北東の二の丸へは幅4～5メートルの帯状地が走り最端は空堀跡かどうか明らかでない。本丸の北西、本丸の北西から登る通路（大手口）に対して北西

隅から尾根に沿って二つの小段、続いて二段の腰部が見られ、本丸への直行を防ぐ目的を持つ本丸の補助部であり通路が尾根に平行して東進するので当然攻城戦になれば本丸を攻める最短コースと思われる。

#### 二の丸

尾根の東部の七面堂地内約40メートル南側の高さ4メートルの土塁を設け城中、最も広く東側1メートル下り腰部をつけている。この二の丸部分が城中の主要部と成るのではないかと思われるが全体的にバランスが悪い。

#### 南出丸

長さ40メートルで南端が比較的平面である反面、北面はゆるい下り勾配で周囲は切り立つ岩場で最南端は幅10メートル、深さ4メートルの空堀で尾根を切断する。この南出丸は物見台状地勢で、なお南へ尾根が長く続いたため、南から尾根伝いに北進される危険に対してのおさえと思われる。

#### 大平新城についての考察

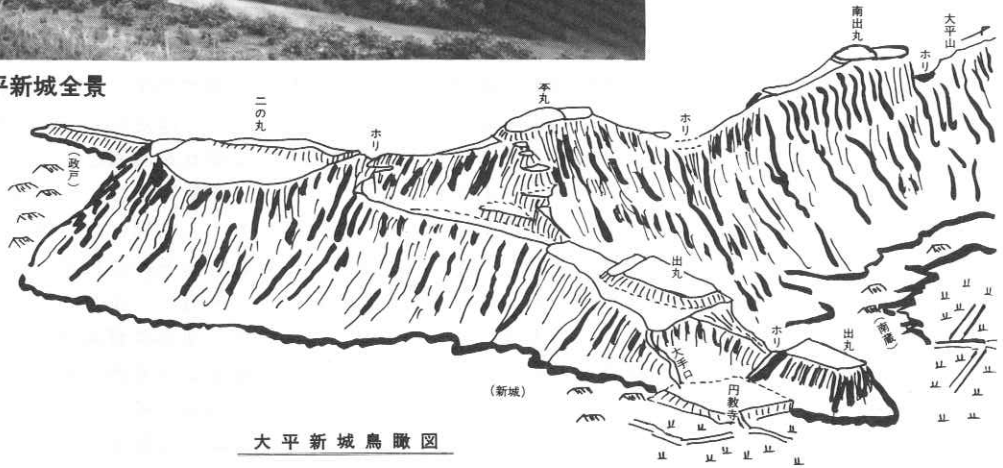
大平新城は葦山城の支堡と思われる。これは駿州から豆州に侵入する武田勢に備え、葦山からは見えない駿豆境いを東行西奔する敵軍勢の動きをいち早くキャッチできる地勢に大平新城が置かれ、その位置は葦山城—戸倉（徳倉）城を結ぶ三角地形にあり、これらの諸城と連絡可能なつなぎの城であった。創築の年代については明確ではないが、元亀元年（1570年）8月9日武田軍が葦山城を攻撃、次で8月13日再び接近、その後北條武田両軍の衝突は戸倉（徳倉）附近において多く行われていることから、この頃大平城の構築がなされたものか、これ以後天正九年（1581年）5月戸倉（徳倉）の笠原新六郎之為が武田に降服し、12月1日武田の援軍をもって戸倉城（徳倉城）の笠原新六郎之為が大平城を攻撃していることから大平城に北條氏が葦山の支城を設けたためかのいずれかと推測される。その結果武田軍は豆州に侵入することが出来ず天正九年（1581年）戸倉（徳倉）の笠原新六郎之為を従軍させ、戸倉城より大平城を攻撃、これを落城させ葦山の前線基地をたたき、葦山に侵入せんとしたものと文献等から察せられる。

いずれにせよ大平新城は独立城ではなく、葦山の支城であると共に葦山城と戸倉城（徳倉城）を結ぶつなぎの役を背おっていたものと推測される。

（館長 永沼朋康）



大平新城全景



大平新城鳥瞰図

## 楽寿園の歴史

### ——小松宮以前の小浜——

小浜池一带は、昔より「小浜」と呼ばれていた。明治23年、伏見宮の第8王子小松宮彰仁親王が別邸を築かれ、その後経緯を経て、現在三島市立楽寿園となっている。

この小浜に、小松宮がみえる前はどのような所であったかほとんど知られていない。そこで、絵図を手がかりに、小松宮以前の小浜の歴史を探ってみたい。

寛政年間(1789-1801)に描かれた東海道分間延絵図をみると、小浜池北岸に、西より「七面」「寶国院」「文徹院」「浅間」「愛染院」の社やお堂が描かれ池の中の宮島に「広瀬大明神」東の小島に「弁天」が祀られている。(表紙写真)

浅間神社、広瀬神社は、現在も鎮座しているが、他の社寺はどうしたのであろうか。

#### (1) 七面社

寛政12年に秋山富南により献上され、明治28年萩原正平によって増訂された豆州志稿によると、本覚寺の項に、

「七面ノ祠小濱ニアリテ寺ニ隸ス

(増) 明治23年小松宮彰仁親王小濱ノ地ヲ相シ

別業ヲ営築スルニ際シ七面祠ヲ寺域ニ移ス」とあるのが、これに当たろう。

本覚寺は日蓮宗の名刹で、応永31年(1424)日出上人の開山なるものである。本覚寺縁起によれば、日出上人は、伊豆国分寺跡に建立発願をして小浜池にて寒垢離を取り37日の行を修したという。この日出上人は、伊豆各所を布教して回り又、鎌倉に東身延本覚寺を建立されるなど名僧といわれている。晩年、再び三島に帰り、小浜の草庵に在って長祿3年(1459)遷化された。

続く二世日朝上人は、後に身延山久遠寺第十一世の法主となり、身延山中興の祖と仰がれている。三島では、今でも本覚寺のことを「日朝さん」と呼ぶ人もあり、人々に親しまれた名僧であった。このように、本覚寺の法燈いよいよ輝き、明応2年(1493)には東33ヶ国(関八州)の総導師職(日蓮宗寺院の総元締め、任免権を持つ)に補せられ、寺勢いよいよ高く、安政の大地震(1855)による倒壊まで、七堂伽藍が立ち並ぶ雄大な寺であったという。

このような歴史を考えると、日出上人との縁より、少なくとも、小浜西部は、本覚寺の影響下にあったと考えられよう。そして、日出上人の草庵跡へ、日蓮宗の守護神「七面大天女」が勧請され

ることになったのであろう。

天保年間（1830-44）に製作された小沼満英筆「三島宿風俗絵屏風」（六曲一隻）の左隻、左上に小浜池が大きく描かれている。（写真①）池の北辺、少し登った所に七面のお堂があり、本覚寺裏より、この七面社に至る参道が整備されていることがわかる。

本覚寺に伺った話によると、江戸時代は七面信仰が盛んであったという。元々法華経の守り神であり、龍神といわれ、女性の神様であった。小浜の七面は「七つの池の七面さん」と呼ばれ、龍神様、すなわち水の神様であるから、小浜池の守り神として厚く信仰されたという。9月18日のお施餓鬼には、小浜用水のかかる村の代表者が、必ず参拝にみえたという。「七つの池」とは小浜池には7つ池があるからといわれているが、むしろ、身延の七面山山頂附近に「7つ」の池があるのにならっているのではないだろうか。この七面さんは、女性の神様という事で、女郎さんの信仰が厚かったともいう。

小浜の地に七面大天女が勧請されたのはいつ頃であろうか。

身延の七面山信仰が文書に現われるのは16世紀末であり、七面山登山が盛んとなるのは江戸時代に入ってからである。さらに七面信仰が全国的に高まる中、江戸の主たる日蓮宗寺院に七面観音（＝七面天女・七面大明神）が勧請されるのは江戸時代中期頃である。いずれも小高い丘の上とか池のほとりという、七面山に凝せる地が選ばれている。

三島本覚寺の七面大天女勧請も、同じく江戸中期頃であろう。日出上人の庵跡が残るこの地は、清らかな池を見下ろす丘で、七面さんの鎮座する場所には最もふさわしいとして、遷されてきたものと思われる。

本覚寺の話では、七面さんは、このころ本覚寺よりも信仰され、ご縁日など大そうな賑わいだったという。

三島の七面社は街道にも広く知れ渡っていたらしく、安政七年（1860）初版の「五海道中細見記」（図②）には三嶋大明神とともに、七面大明神が記載されている。この書は、幕末の細見記（道中案内の書）の中で最も有名なものの一つであるが、社寺の記載は割合に少ない。例えば三島から府中（静岡）までに10社寺載せるのみである。その一つに、七面社がとりあげられている事は、幕末期、三島の七面さん信仰が盛んであった事を物語る

いよう。

さて、七面社はいったいどこにあったのであろうか。明治20年測量の2万分の1の地形図（図③）を見ると、小浜池北に鳥居がある。ここが七面社であろう。現在の地図と重ねてみると、楽寿園の食堂あたりに位置していたようである。食堂東南に残る石だたみは、恐らく七面社の参道の一部であろう。本覚寺の東北より、常盤の森を抜けて、この石だたみを上がった所に七面社があったものと思われる。

尚、小松宮が明治23年にみえる前の本覚寺領がどれほどであったかは定かでないが明治20年の地図をみると、小浜丘を北限として、東は、浅間神社まで、西は、本覚寺脇まで、点線で囲まれ、荒地となっている。この周は空白地帯で、畑地か、公有地とみられ、わざわざ荒地を特に囲い込んである所は特別な所有、つまり寺領であったと想像される。この中の東部は寶国院領と考えられるので、小浜池の東岸より北西へ伸びる道を境として、その西部が本覚寺領と考えられよう。今の関野医院あたりから寿町の一部を含む、広大な寺領であったようである。

明治23年「小浜丘之図」（畔柳対水筆）（写真④）ここには、小松宮が別邸を築く直前の小浜池周辺の景観が描かれている。

中央にみえる大きなお堂が七面社、その周辺に墓地が広がる。広瀬神社の祀られている宮島には高床式の休憩所が出来ており、よい涼みの場所になっていたようだ。小浜池の堤は、すでに出来ている。

ここへ、富士に演習にみえた小松宮が立ち寄られた。宮は、この地をいたく気に入られ別邸を建てる事を強く希望されたという。宮家の命令で小浜池一帯は宮家に献上される事になった。お上の威光に抗しがたく、七面堂及び墓地は、悉く現在の本覚寺境内に移されることになったという。

間口数間あったという、七面堂の拝殿は、本堂の位置へ移築されたが、今は建て替えられて昔の面影はない。内陣は、境内のあさひ保育園北側のお堂に移され、美しい七面天女と、それを収める厨子は昔に変わらず光彩を放っている。（写真⑤）墓地も移され、お骨は全て掘り出されて、今は歴代住職の墓の下に眠っている。

宮家より、本覚寺へ、土地献上のお礼として、茶釜と、小松宮の手なる「関八州総導師」の書が下賜されたという。茶釜は、太平洋戦争に供出さ

れた。書は、これを版下として、木彫の扁額が製作され、本覚寺玄関に掲げられている。(写真⑥) こうして明治23年小浜一帯は、小松宮別邸となり、この時に、小浜池は本格的築庭がなされ、楽寿館が造営された。

降ってわいた移転命令に、本覚寺と檀信徒は、大騒ぎであったろう。「小松宮様ご来島」騒動を知るものは、今は小さな七面天女と、「関八州総導師」の扁額のみである。

## (2) 寶国院

豆州志稿によると

「寶国院(號觀池山)

○小濱ニアリ 舊蓮馨寺の隠寮ナリ  
(九畝十八歩除地)

(増) 明治五年廢ス

とある。広小路にある蓮馨寺の隠居寺であったが明治5年に廢寺になったということである。

蓮馨寺の菊地住職の話によると、寺の言い伝えでは、小浜の地に寶国院という蓮馨寺の末寺があったという。明治23年小松宮が別邸を造営された時に、寶国院の土地は全て献上され、その返礼として、姿のよい松を一本下賜された。この松は、本堂東側に植えられていたが、今は枯れてないという。寶国院の正確な位置はわからないが、かつて、蓮馨寺の寺領は、広瀬川と小浜用水とにはさまれた地、小松宮別邸の石垣まであったので、その昔は、小浜池の北方まで伸びていたのではないかと、という話であった。

三島宿風俗絵屏風では、小浜池のほとりに建つ建物が寶国院であろうか。

小浜丘の図を見ると、浅間神社の西北方向に、墓地があり、すぐ南側が広げて草叢となっている。おそらく、ここが、寶国院の跡と思われる。

現在、楽寿園の東の正門より西へ100mほど上った所に木立に囲まれた中に礎石が並ぶ場所がある。ここは、かつて緒明氏が、三島大社の門を移し東屋（むねや）にしていた跡といわれる。後にこの建物は再び大社に移され、今の芸能殿となっており、礎石のみ残されたものである。小浜丘の図を検当すると、このあたりが、かつての寶国院の場所ではないかと思われる。ここより石段が早叢の中を南へ下りているが、これはかつの参道ではないだろうか。

又、明治23年当時の寶国院領は、本覚寺領の東小浜池東岸より北西へ上がる道と、浅間神社より上がる道にはさまれた地であったと思われる。

## (3) 文徹院と愛染院

文徹院は、分間延絵図には記されているが、他の図には見えない。

豆州志稿には次のように記載されている。

「廢文徹寺

舊専念山音聲院ト稱シ 紫町ニアリテ僧文徹ヲ開祖トス。元和9年(注1623)小濱ニ徒シ小堂ト爲ス。後之ヲ廢ス

(大日像ハ長圓寺域内観音堂ニ安ズ)

(ニ反歩除地)」

文徹寺は、僧文徹が紫町に開山したもののだが、元和9年に、小浜の地へ遷された小堂である。そして豆州志稿が草された寛政頃までには廢寺になったということである。

大日像があるという長円寺に伺うと、寺の言い伝えでは、かつて長円寺の屋敷内に文徹寺があったという。その所在は明確ではないが、愛染小路あたりということである。

さらに、かつては長円寺の寺領は三島駅前あたりまで広がっており、浅間神社も又、長円寺の寺内にあった。そして愛染院も長円寺寺内にあったとも伝えられているそうである。

しかし、明治初年の神仏分離の際に浅間神社は分離し、長円寺寺域も現在の規模になったという。

長円寺は、大永四年(1524)増誉上人が開山した寺で、江戸期にはかなり勢力を持っていた。

愛染院が、長円寺の寺域にあったという事は、長円寺の寺領へ愛染院が遷ってきたという事であろうか。かつて愛染院は三嶋大社社家の裏にあったといわれているので、長円寺創建後の戦国期から江戸初期にかけて、水上の地に、遷ってきた可能性があると思われる。

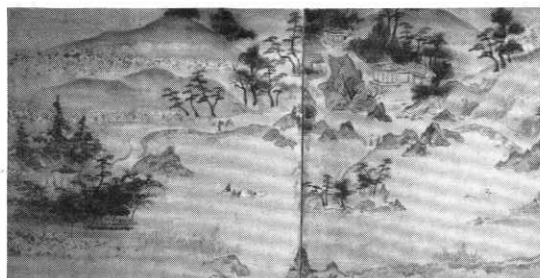
愛染院は周知の通り、三嶋大社の別当寺であった。非常に強い勢力を持った寺と言われているが幕末には、三嶋大社の社僧として、神主の支配下に入っていたようである。安政の大地震で倒壊した堂宇は終に本格的に再建されなかった。明治元年の神仏分離令が出されると、三嶋大神神主矢田部盛治の命により、社僧小出定弁は環俗せられ、大社の社家の番頭という地位に甘んずる。境内の立木、仮本堂も全て売り払われた。勢力を誇った名利も、大きな時代の変革期に、あっけなく歴史から消え去ってしまった。

この愛染院の寺領が、いったいどれくらいあったかは不明である。明治20年の地図では、浅間神社の北方、富士登山道と、菰池から白滝にはさま

れた地域が空白となっている。明治23年の小浜丘の図でもこの地域は、墓地が2ヶ所と、立木が数本あとは荒地となっている。菰池に近い墓地は、三島大社神官の墓地として今も残る。ここが、かつての愛染院跡であろう。

溶岩の残る地は、耕作に適さず、愛染院が廃された後、そのまま荒れ果てたものであろう。恐らく、明治7年の地租改正の時にも、上地されず、公有地に組み込まれていった可能性が強いと思われる。

(4) まとめ



① 三島宿風俗絵屏風 左隻 小浜池部分



② 五海道中細見記 三島宿部分



③ 明治20年測量23年出版2万分の1地形図

こうしてみると、小浜の地は、小松宮がみえる前までは、寺院や、社の並ぶ、いわば三島の北山とでも言うべき地であった。

伊豆ノ宮浅間神社、四ノ宮広瀬神社は古代より祀られており、その小浜池の水は、田を浸す大事な水源であるので人々の信仰も篤かったのであろう。

明治23年、小松宮がみえた時、移転させられたのは、寺院関係だけである。明治初年の神仏分離令に始まる、排仏毀釈の気風が、残っていたとも言えよう。

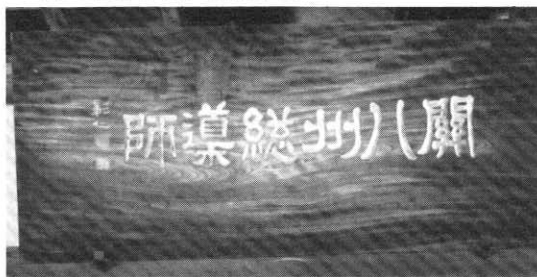
(福田)



④ 小浜丘之図 (明治23年)



⑤ 七面大天女 (本覚寺)



⑥ 「關八州総導師」の扁額 (本覚寺)

郷土館だより No.24

昭和61年3月10日発行

(年3回発行)

編集 三島市郷土館  
住所 〒411 三島市一番町19-3  
TEL 0559-71-8228  
発行 三島市教育委員会